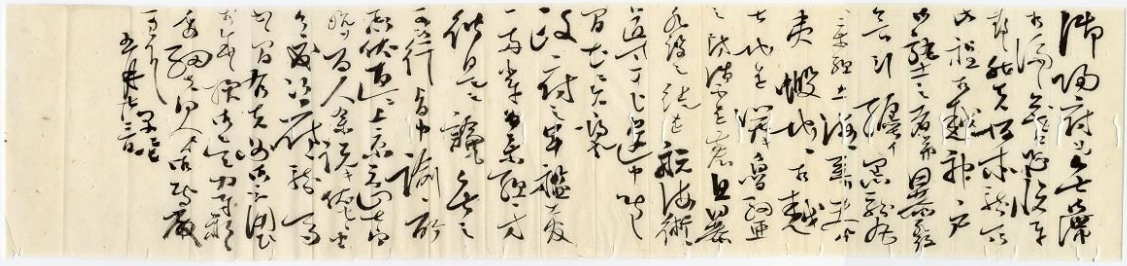


勝海舟基金 ～令和5年度 活用報告～

あたたかいご支援をありがとうございます。

平成30年8月から募集し、令和5年度末までに累計で1,201件61,907,454円のご寄附を賜っています。ご寄附の一部を、次のとおり活用しましたので、ご報告申し上げます。

■資料の収集 海舟ゆかりの資料260点を購入しました。購入した資料の中から1点ご紹介します。



本資料は、海舟や坂本龍馬の理解者として知られる大坂町奉行・松平大隅守信敏が、元治元(1864)年5月23日付けで海舟に送った新発見の手紙です。この時海舟は、将軍・徳川家茂と共に江戸に戻った直後でした。また軍艦奉行に新任され、神戸海軍操練所を軌道に乗せるべく尽力していた時でもあります。

そんな海舟に信敏が伝えてきたのは、坂本龍馬の動向でした。『龍馬から“神戸の海舟門下生と「暴発之徒」とを糾合し、幕府軍艦で蝦夷地(現・北海道)に渡らせ、南下するロシアへの備えを兼ねて開拓させると共に、航海術の教導を図りたい”と聞かされたので、“政府の海軍士官を同行させるべき”と助言した。現在龍馬は、京都で北添佶磨(本山七郎)ら土佐藩尊攘派を説得しており、近日中にあなたのもとにも参上するだろう』との内容です。

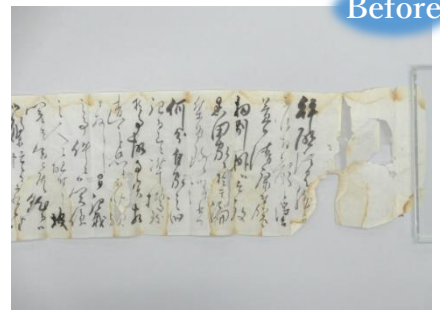
実際に龍馬は6月17日に海舟を訪れ、いわゆる「蝦夷地開拓構想」を披露しており(海舟日記)、本資料はこの前段における人の動きを鮮明に伝えています。なお、龍馬が接触した北添は、6月3日の池田屋事件で海舟門下生・望月亀弥太らと共に殺害されており、この事件が後の神戸海軍操練所閉鎖と海舟失脚の遠因となるのですが、この時にはまだ、誰にも知る由がありませんでした。

■資料の修復 32点の資料を修復しました。その中から1点ご紹介します。

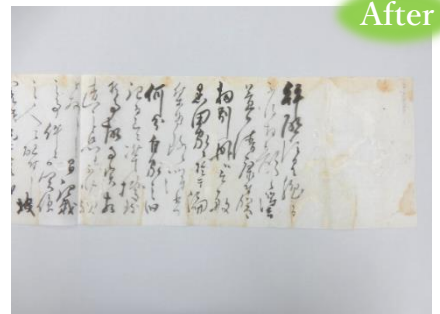
昔の手紙は多くの場合、横長の和紙に文章が縦書きされています。長文になる場合、複数枚の和紙を糊で貼り足して文章を続けたわけですが、当時の糊は、現代の化学糊とは異なる自然由来の「でんぷん糊」で、時間が経つとわずかな力で継目が剥離するほど粘着が弱まり、分解しやすくなります。また、和紙や糊自体が害虫の餌になりやすいため、古文書の多くには虫損があります。手当てと適切な管理無しでは次第に朽ちてしまうため、当館では公開と保存に耐え得るような処置を専門業者に依頼しています。

剥離した糊代部分にでんぷん糊を再塗布して丁寧に貼り合わせたり、欠損部分に同質の和紙を当て、安全に取扱うための必要最低限の補強を施したりしています。

Before



After



これまでにご報告してきた修復等についても公開しております。右記コードより、“勝海舟基金活用報告”をご覧ください。

